

学校における自殺予防 —教育の立場から—

田中 慎一郎

熊本市立帯山中学校 教頭



略 歴

- 1999年度～2001年度
松橋町立松橋中学校 教諭
- 2002年度～2007年度
本渡市立佐伊津中学校 教諭
- 2008年度～2010年度
スリランカ コロンボ日本人
学校 教諭
- 2011年度
天草市立本渡中学校 教諭
- 2012年度～2017年度
熊本市立三和中学校 教諭
- 2014年度～2016年度
熊本市教育センター研究員
「情報モラル部会」部会長
- 2016年度～2017年度
熊本市中学校生徒指導委員会
事務局長
- 2016年度～2017年度
熊本県国際教育研究会
事務局長
- 2018年度
熊本大学 非常勤講師
- 2018年度～2020年度
熊本市教育委員会事務局
指導主事
- 2019年度
文科省委託 SNS等を活用し
た相談体制の在り方に関する
調査研究運営委員
- 2021年度～
熊本市立帯山中学校 教頭
公認心理師
RKK ラジオ「江上浩子の
ニュース515」レギュラーコ
メンテーター

自ら命を絶とうとする子どもたちがいる。そういった子どもたちを前にした時、「命を粗末にするのはいけない。」と言って命の大切さを伝えようとする。しかし、私はこれに違和感を感じる。なぜなら、子どもたちは命が大事であることを十分わかっているからだ。その大事な命と抱えているつらさを天秤にかけた時、大事な命を捨てたくなるほどのつらさを抱えているということではなからうか。彼らは、それをわかってもらいたいのである。「死にたいのではなく、生きたくないのです。」と生徒に告げられたことがある。つらさを抱えたまま歩くのがきついでその歩みを止めたくなるのだそうだ。逆に言えば、もしも抱えている荷物をおろすことができるのであれば生きたいのである。そう考えると子どもたちが口にする「死にたい」が「生きたい」に聞こえてくる。そういった子どもは周囲に抱えさせられている荷物の存在に気づいてもらいたいと思っており、それをできることなら一緒に抱えてほしいと願っている。子どもたちの命を守るには、彼らから周囲の人間にSOSを出してもらうことが大切だ。そうすればゲートキーパーなる人は、100%つらさに気づくことが出来るし共に抱えることも可能である。

しかしながら、昨今、子どもたちの援助希求が低下しているという記事をいろんなところで目にする。文部科学省もSOSの出し方に関する教育を全国の様々な学校で進めている。本当に子どもたちがSOSを出す力を無くしてしまったのであろうか。私はそうは考えない。そもそも、子どもはSOSを出す天才で、赤ん坊の頃は泣くことで表現し、少し大きくなると駄々をこねることで大人に気持ちを伝えようとする。もしかすると、受け手の大人たちがSOSを受ける力を無くした結果、子どもたちが大人を諦めたのではないかと思うことがある。

そこで、現在帯山中学校ではSOSを受け止める環境を整えることを視点にして3つの取組を試験的に運用している。まず一つ目は、「ほっと相談」という取組である。月に一度のアンケートでは、その時に必ずしも相談したいという気持ちになるかどうかはわからない。24時間いつでも一人一台配布されている端末から管理職へ相談を投稿できるという実践である。二つ目は「帯中カタリバ」で、ピアサポートの視点に立った生徒同士が互いに相談し合う取組である。三つ目は、SOSの出し方に関する通信の発行で、具体例を出しながら心理的な側面から物事の見方や捉え方をお便りという形で生徒に配布している。詳しくは下の二次元バーコードから動画説明を見ることができるので確認いただけたらと思う。また、それら一連の取組の様子は帯山中学校のホームページから閲覧できるので参考までにこちらのバーコードもあわせてご覧いただければ幸いである。

